

写真13 墨書き符号写真（1）



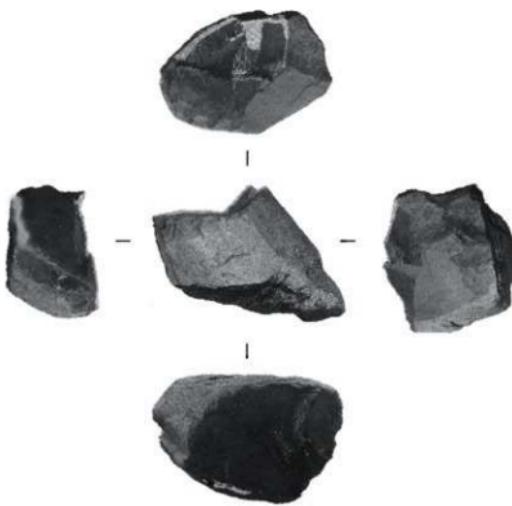
写真 14 墨書き符号写真（2）



写真 15 墨書き符号写真（3）



石材4



石材5

0 (1 : 30) 2m

図 58 石材三次元計測図 (1)

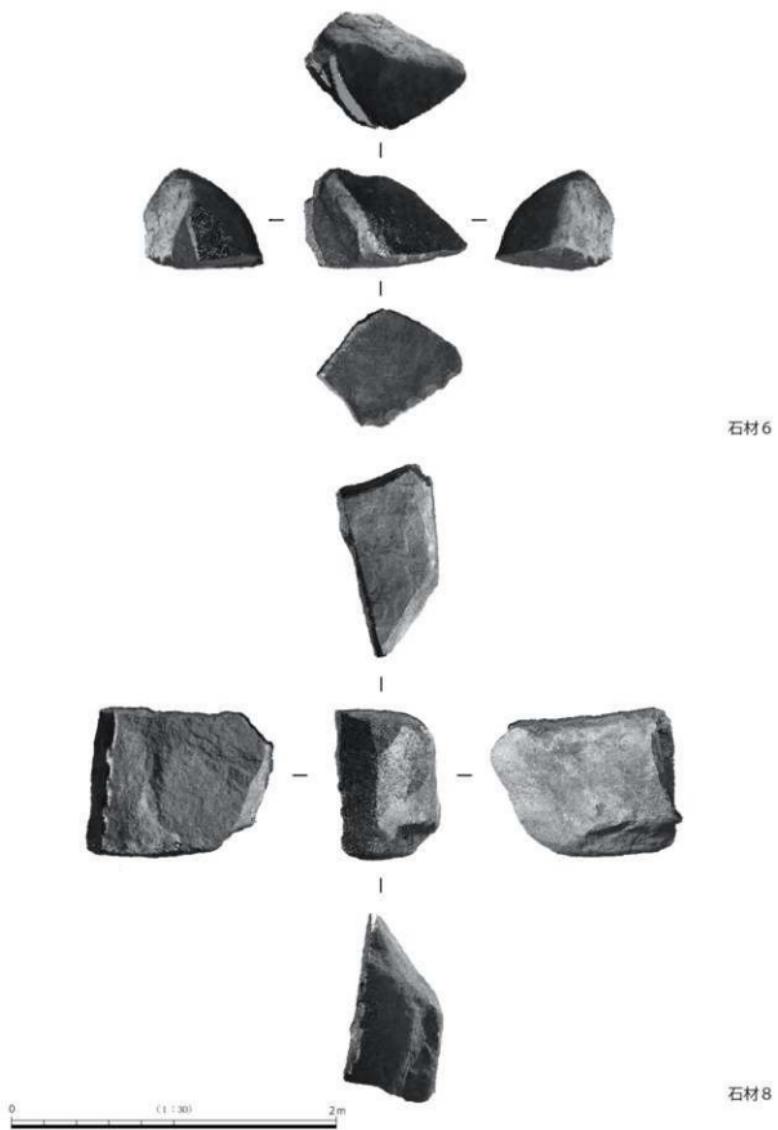
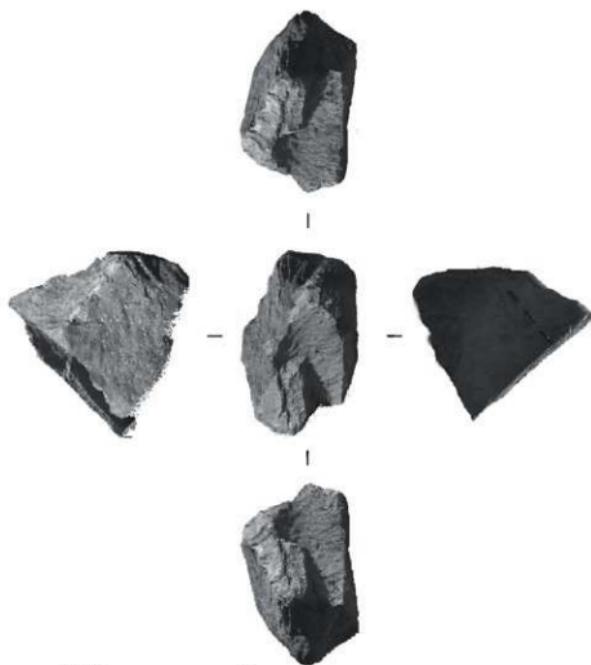


圖 59 石材三次元計測図（2）



石材 10



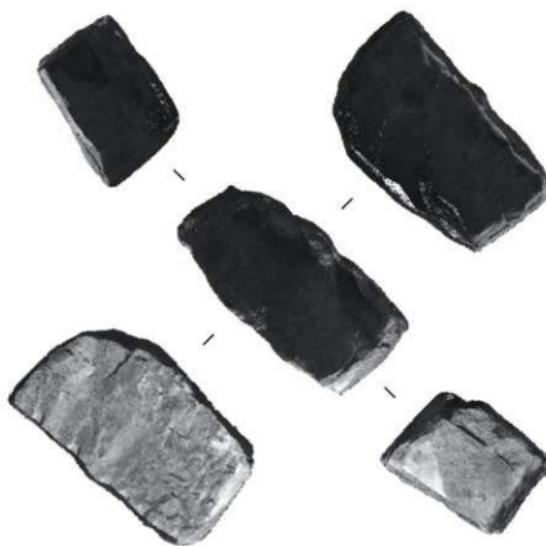
石材 11

0  $(1:300)$  2m

圖 60 石材三次元計測図 (3)



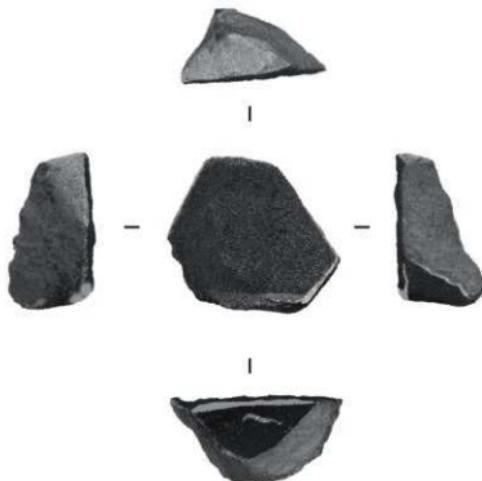
石材 12



石材 14

0 (1 : 300) 2m

図 61 石材三次元計測図 (4)



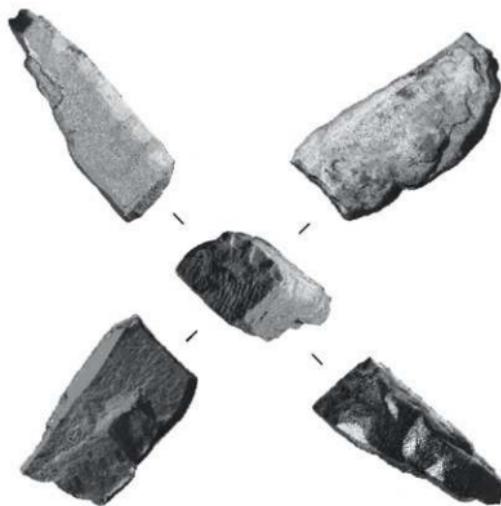
石材 16



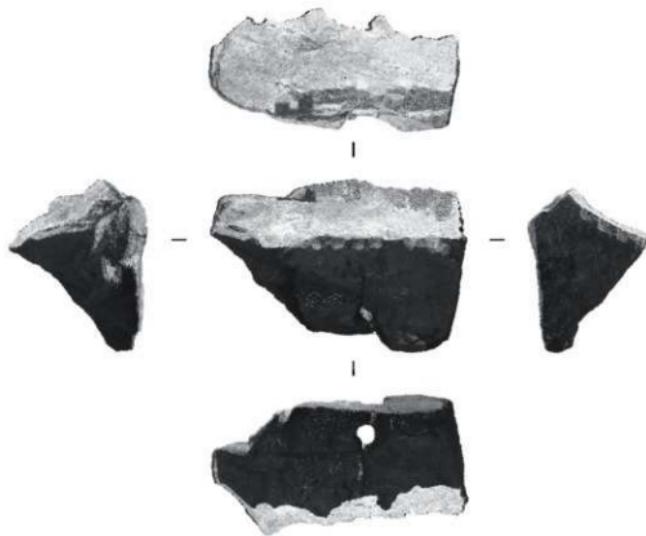
石材 27

0 (1 : 30) 2m

圖 62 石材三次元計測図 (5)



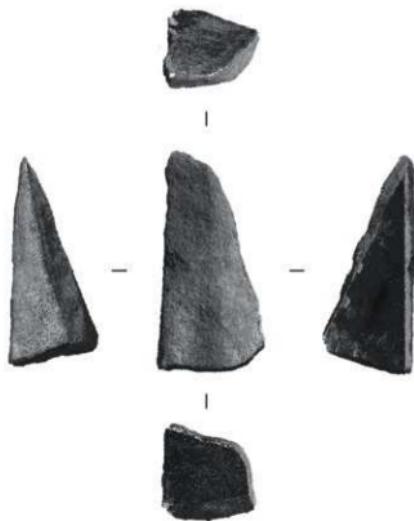
石材 37



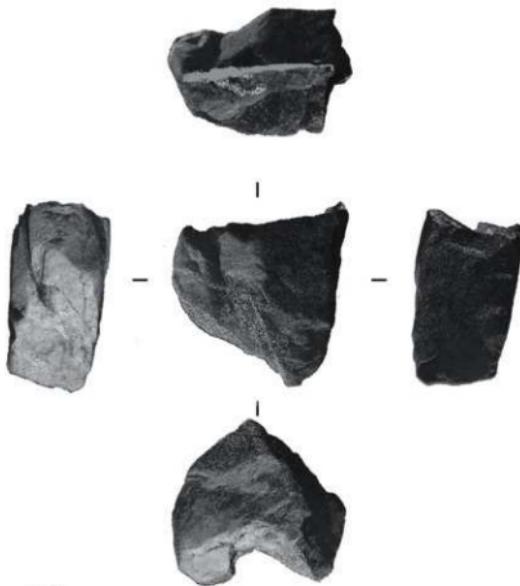
石材 40

0 (1 : 30) 2m

圖 63 石材三次元計測図 (6)



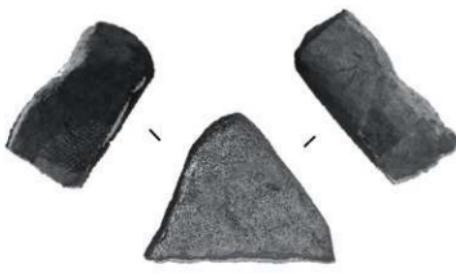
石材 43



石材 46

0  $1:300$  2m

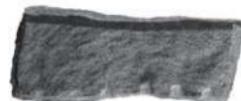
圖 64 石材三次元計測図 (7)



|



石材 49



|



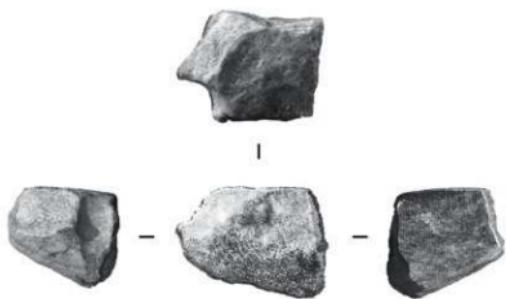
|



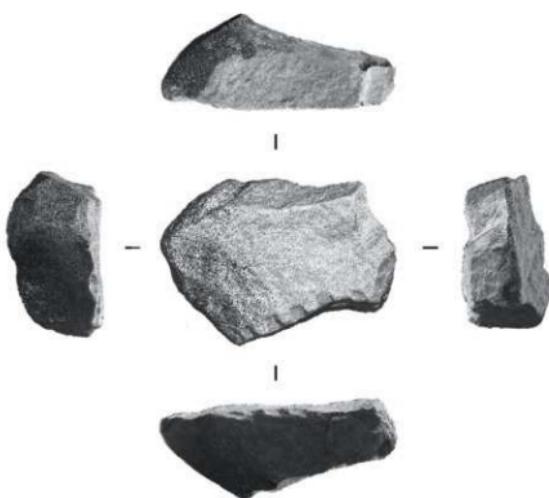
石材 50



圖 65 石材三次元計測図 (8)



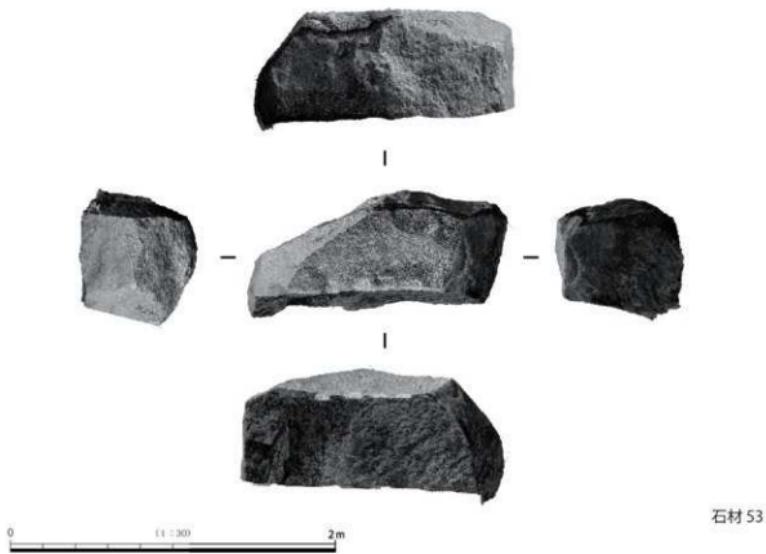
石材 51



石材 52

0 (1 : 30) 2m

圖 66 石材三次元計測図 (9)



石材 53

図 67 石材三次元計測図 (10)

#### 4項 1・2区の出土遺物

本項では、1・2区の出土遺物を（1）陶磁器・土器・土製品、（2）瓦塼類、（3）木製品、（4）銭貨、（5）金属製品、（6）石製品に分け記述する。その際、調査区毎に遺構から出土した遺物について記した後、4層と呼称している徳川大坂城築城に伴う造成盛土から出土した遺物について記述する。なお、巻末に表24を掲げ、出土位置・層位を示す

##### （1）出土陶磁器・土器・土製品

出土陶磁器・土器・土製品は、縮尺を1／4で掲載しているが、特に必要と思われる陶磁器については写真を填め込んでの実測図を作成しており、文様などの特徴がわかるよう縮尺を1／3としている。

そのため実測図の掲載・記述とも、陶磁器については写真嵌め込みを先に、その後に他の陶磁器・土器・土製品について行った。同一遺構内の記述において遺物番号が連番になっていないこと、煩雑ではあるがご容赦いただきたい。

1区

45 堀

45堀は、豊臣期大坂城二の丸生玉口（大手口）を逆コの字型に囲む堀の一部である。2区において26堀としている遺構の北延長部分にあたる。調査区内では西肩を検出したのみであり、細かな点は不明であるが、遺物は大坂冬の陣講和後に徳川方によって埋められた堀の埋め土からの出土と考えられる。本遺構からは、図68-54・図73-123が出土している。

54は瀬戸・美濃天目碗で、内外面に鉄釉を施すが高台周辺を露胎とする。123は焼塙壺である。

42・43 落込み

遺構の項で述べたように42・43落込み埋土は、4層に含まれる。従って出土遺物も4層の年代に合致するものである。

42 落込み

以下は図73に掲げる。

116は見込みに草花文の印刻がみられる青磁碗である。龍泉窯系か。117は白磁菊皿である。118は白磁皿の底部と考えられる。119は土師器の杯で内面に暗文がみられる。120～122は土師質土器大皿である。

43 落込み

以下は図68に掲げる。

55・56は瀬戸・美濃である。55は大窯の灰釉折縁ソギ皿で、高台内を露胎にする。56は鉄釉内禿皿で、全面施釉の後、内面見込は釉ぬぐい、底部外面に輪トチ痕が認められる。

57～60は青花である。57～59は景德鎮窯系の碗である。57は見込を園線で画し十字架文が描かれる。60は皿で見込みに蛇の目釉はぎ、高台内は露胎で段が認められる。

以下は図74に掲げる。

124は瀬戸・美濃の天目碗である。125は唐津の皿か。内面見込みに砂目がみられる。

126は白磁の端反皿である。127は青磁碗で、内面見込みに草花文の印刻がみられる。128は青磁の端反皿である。

129は備前の鉢。130・131は備前の壺で、底部にヘラ記号が認められる。130は三本の線、131

は2本の線とやや離れて直行する1本の線が引かれている。132は丹波の大平鉢である。

133～140は土師質土器皿である。141・142は土師質土器皿で、いずれも底部外面に指頭圧痕がみられ、口縁部外面に横ナデを施す。143は焼塙壺の蓋である。

#### 4層

4層から出土した陶磁器・土器・土製品について述べる。繰り返しになるが4層は、元和6（1920）年から始まる徳川大坂城築城の大規模な造成に伴う盛土で、大坂夏の陣由来の焼土塊や焼け歪んだ瓦、焼けた陶磁器を含んでいる。なお、出土磁器に伊万里焼が含まれない。以下、器種ごとに記す。

#### 碗

下記は、図69に掲げる。

61は瀬戸・美濃の天目碗である。器高がやや低い。鉄釉を施すが、高台から体部中ほどまでは露胎にする。

62・63は唐津である。62は二次焼成を受けており、内外面とも釉の剥落がみられ、口縁部の破損部は黒く変色している。63は鉄釉を施すが、体部下半は露胎とする。高台は畳付けに糸切り痕を残し、三日月高台となる。

下記は、図77に掲げる。

187～190は瀬戸・美濃の天目碗である。187・188は体部下半を除き鉄釉を施す。189は体部下半に薄いが鉄釉がみられる。190は畳付けと高台内は露胎である。191は瀬戸・美濃の碗である。鉄釉を施すが、畳付けと高台内側は露胎である。

192～197は唐津である。

192は体部下半を除き鉄釉を施す。193体部下半を除き施釉し、高台内には兜巾を残す。194・195は体部下半を除き施釉するが、一部釉が高台まで垂れている。高台内には兜巾を残し縮緬皺がみられる。

196・197は体部下半を除き施釉する。196は底部と体部の境が不明瞭で、内面見込には3ヶ所の胎土目がみられる。

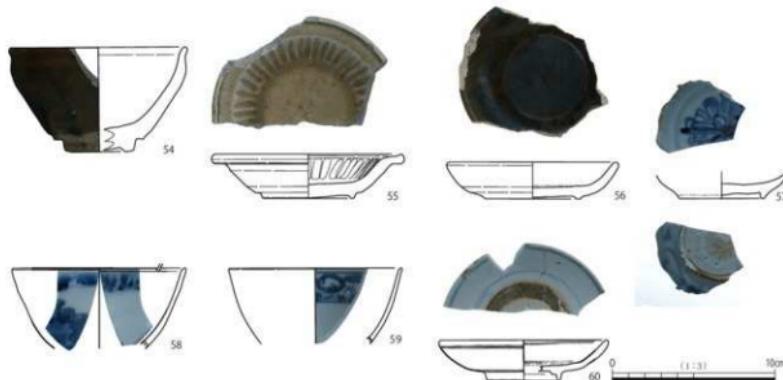


図68 1区45堀・43落込み出土陶器・輸入磁器



图 69 1区4层出土陶器 (1)

## III

以下は図 69・70 に掲げる。

64～68 は瀬戸・美濃である。

64 は丸皿で、全面に灰釉が施釉される。高台内に輪トチ痕がみられる。65 も丸皿で、内面見込みに二本の團線内に蘭竹の模様を鉄釉で描き、全面に灰釉を施す。高台内に円錐ピンの痕が残る。66 は黄瀬戸の皿である。胆鬱がみられる。67 は丸皿で、内面見込みに二本の團線が鉄釉で描かれる。團線内にみられる模様は蘭竹か。全体に灰釉を施す。高台内に円錐ピンの痕が残る。68 は体部全体が直線的であり、稜皿とすべきか。全面に鉄釉を施す。高台内に輪トチ痕が、内面見込に円錐ピンの跡が残る。

69～75 は唐津である。

69 は三日月高台で、高台内に兜巾を残す。また高台内には墨書がみられる。内面見込みには胎土目



図 70 1区4層出土陶器（2）



图 71 1区4层出土输入磁器

がみられる。70は口縁部に鉄釉をかけ、体部外面下半を除き透明釉を施す、いわゆる「皮鯨手」である。内面見込みには胎土目がみられる。71は高台部を除き長石釉を施す。内面見込みに3ヶ所砂目がみられる。72～75はいわゆる絵唐津である。内面見込みに鉄釉で模様を描く。体部下半を除き透明釉が施される。

85・86は志野皿である。

85・86とも内面見込みに文様がみられ、底部は甚簡底である。

以下は図77に掲げる。

200～206は瀬戸・美濃である。

200・201はひだ皿で、鉄釉を施す。202～204は丸皿である。202・204は全面に灰釉を施す。

205は灰釉を施す内禿皿である。206は甚簡底で全面に灰釉を施す。

207～212は唐津である。

207は高台部付近を除き、乳白色の釉を施す。釉だまりが体部外面下部にみられる。口縁部が変形しており向付の可能性もある。

208・209は体部下半を除き灰色の釉を施す。三日月高台で高台内に兜巾を残す。208は内面見込みに胎土目が3ヶ所みられる。210は体部下半を除き乳灰色の釉を施す。全体に二次焼成を受ける。211は口縁部が外反する端反形の皿で、体部下半を除き釉を施す。高台付近は二次焼成を受け黒色を呈する。

212は内面には段を有し、口縁部が外反する。体部下半を除き釉を施す。

213～215は志野である。

213・214は丸皿で、215は菊皿である。いずれも長石釉を施す。

#### 向付

以下は、図69・70に掲げる。

76・77・79～81は唐津、78・82・83は志野、84は織部である。

76は皿もしくは向付で、内面見込みに鉄釉で模様が描かれる。体部下半を除き透明釉が施される。

77は口縁部を変形させたもので、内面見込みと口縁部内面に鉄釉で植物の模様を描く。79・80は内面見込みに鉄釉で文様を描く。81は外面に鉄絵がみられる。78は口縁部小片である。内面に鉄釉で文様を描く。82の底部は甚簡底である。83は小片であるが内面に鉄釉で文様を描く。84は織部向付である。銅線釉(織部釉)を掛け分けし、掛け残した外面に絵文を鉄釉で描く。内面にも鉄絵がみられる。

下記は、図77に掲げる。

217～218は唐津である。

217は高台部分を除き釉を施す。外面にわずかに鉄絵が認められる。218は口縁部を内側に窪ませ輪花状に整える。口縁部内面には段を持つ。高台内に兜巾を残す。体部下半を除き施釉する。

#### 小杯

図77～216は唐津の小杯である。体部下半を除き釉を施す。三日月高台で、高台内に兜巾を残す。

#### 茶入れ

図70～87は瀬戸・美濃の茶入れである。小片であり全体は不明だが、底部外面付近を除き内外面とも鉄釉を施す。図77～198は唐津の茶入れの底部である。底部付近を除き乳灰色の釉を施す。底部糸切りである。図78～244は備前の茶入れの肩部分である。図78～245は瀬戸・美濃の茶入れの底部である。高台部を除き鉄釉を施す。

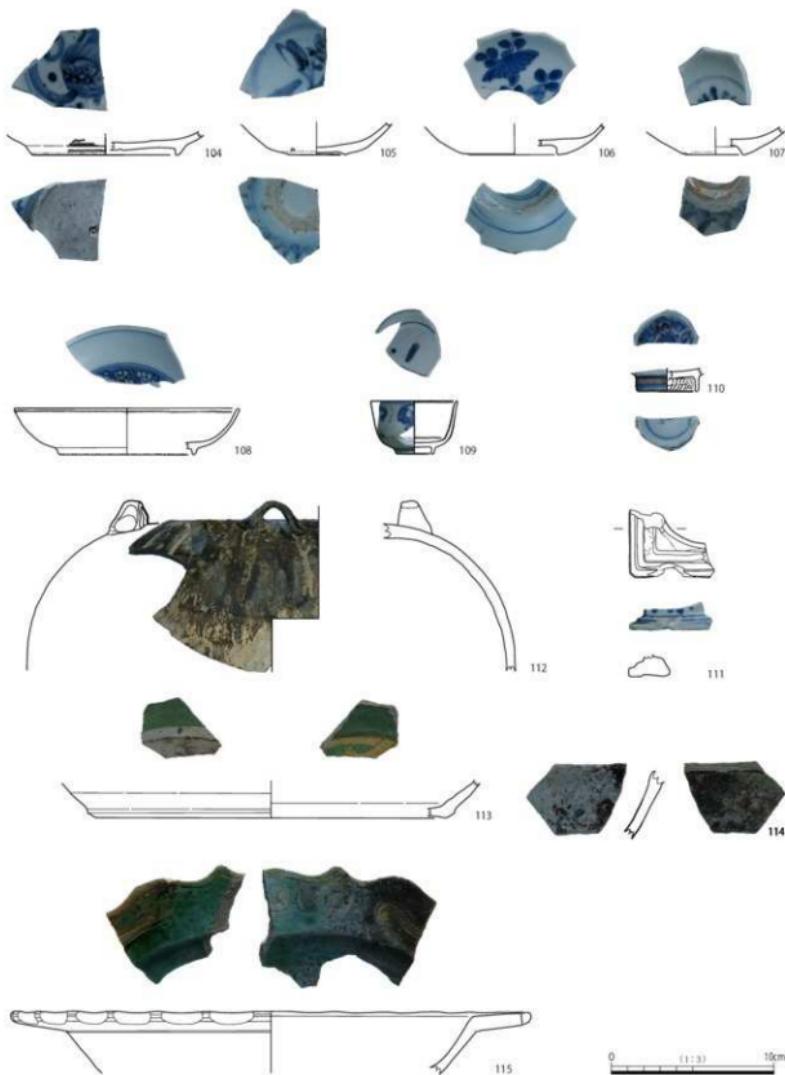


図 72 1区4層出土輸入陶磁器

## 擂鉢・その他

図 77 - 199 は唐津の瓶の底部か。残存部分は露胎で、底部外面に貝目が認められる。

以下は図 78 に掲げる。

233・234 は唐津の片口鉢である。233 は口縁端部を除き施釉する。234 は高台を除いて釉を施す。高台内に兜巾を残す。236 は唐津の瓶か。肩部に横長の耳が付く。内面には青海波文がみられる。238 は壺で外面を施釉し、肩部に立方向の環状の耳がみられる。产地は不明である。上層から混入した可能性も考えられる。248 は唐津の擂鉢、底部である。

## 輸入陶磁器

以下は、図 71・72 に掲げる。

88 は青磁、103 は白磁、89 ~ 102・104 ~ 109・111 は青花、110 は色絵、112 ~ 115 は陶器である。

88 は龍泉窯系の青磁碗で、外面に細線で蓮弁文を刻む。

103 は漳州窯系の白磁で、軟質の素地である。内面見込みは釉剥ぎ、高台付近は露胎で高台内に十字形の墨書きがみられる。

89 は粗製の青花碗である。90 は粗製の青花碗で、高台内は露胎である。91 は景德鎮窯系の碗で饅頭心となる。92 は陶胎で粗製の碗である。内面見込みは釉剥ぎで、高台内は露胎である。93 は碗で、高台内は露胎である。94 は陶胎に近い碗である。高台内は露胎である。95 は碗である。96 は粗製の青花碗である。102 は景德鎮窯系の鉢である。口縁部はやや内湾しながら立上り、端部を輪花状に仕上げる。97 は景德鎮窯系の小碗である。

98 は皿で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎ、高台内は露胎である。99 は景德鎮窯系の皿である。100 は皿で、高台内に銘款が認められる。101 は皿である。104 は景德鎮窯系の皿で、高台内は露胎である。

105 ~ 107 は基督教底の皿である。108 は景德鎮窯系の皿である。

109 は景德鎮窯系の小杯で、高台内は露胎である。外面及び口縁部内面の器壁が二次焼成を受けたためか、荒れてザラつく。110 は景德鎮窯系の色絵小杯の高台部である。

111 は祥瑞の器台片である。

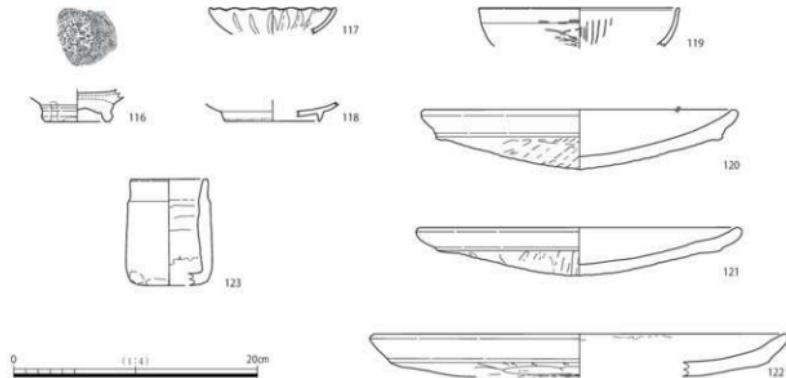


図 73 1区 45 堀・43 落込み出土土師器・磁器・土師質土器



図 74 1区43 落込み出土陶器・焼締陶器・輸入磁器・土師質土器

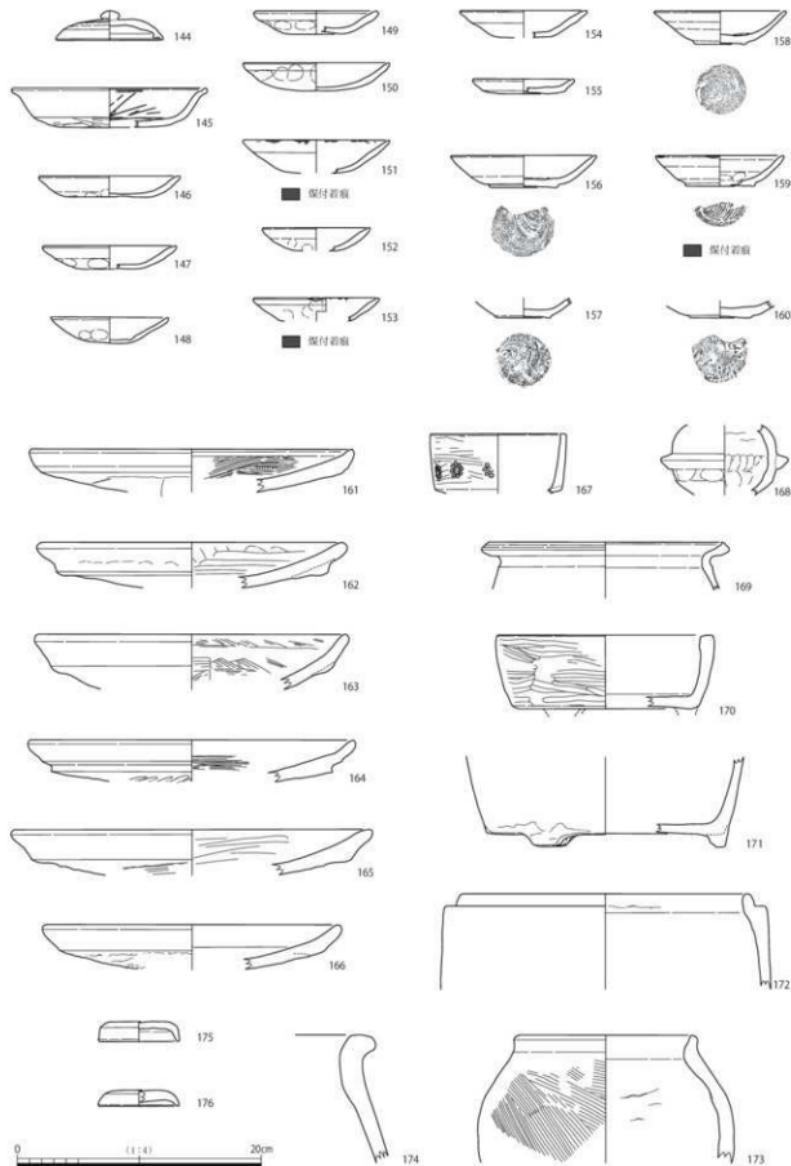


図 75 1区4層出土土師器・陶器・焼締陶器・土師質土器・瓦質土器

112は中国製輸入陶器の茶壺である。

113・114・115は軟質施釉陶器、華南三彩の盤である。

以下は、図77に掲げる。

220～227は白磁である。

220は肉厚な玉縁をもつ碗、白磁碗IV類である。221・222は碗である。222は印刻が浅く圓化できなかったが、内面に亀甲状の模様がみられる。223は菊皿である。224は端反碗か。225～227は端反皿である。

228は上層から混入した可能性も考えられる、青磁の盤もしくは鉢である。

以下は図80に掲げる。

259は陶器で、浅鉢状の器形である。中国または東南アジア製と考えられる。260・261は焼締陶器で、ベトナム製の長胴瓶である。262は中国製の灰釉陶器である。263は焼締陶器の中国製の壺で、欠損して貼り付けの痕跡しかみられないが、縱方向の環状の耳が4つ付くと思われる。264は陶器で、朝鮮製の徳利である。

焼締陶器

以下は図78・79に掲げる。

229は備前の建水である。230・231は備前の大平鉢、232は備前の鉢である。

237は備前の片口鉢である。239は丹波の壺である。240・241は備前の壺である。242は信楽の壺の口縁である。243は備前の壺の底部か。246は備前の壺の肩部である。247は信楽の煎餅壺である。

249・250は丹波の擂鉢である。251～253は備前の擂鉢、254は備前の大甕である。255は丹波の甕、256は信楽の甕である。257は产地不明の甕である。内面は明赤褐色、外面はにぶい赤褐色、断面は明赤褐色を呈する。内外面とも器面に、乳白色の鉱物粒が多くみられる。体部外面は横方向のナデを施し、内面上半部には指頭圧痕がみられる。

須恵器

図75～144は端部にかえりの付く小型の杯蓋である。

図79～258は須恵器の蓋である。外面に墨書きがみられる。

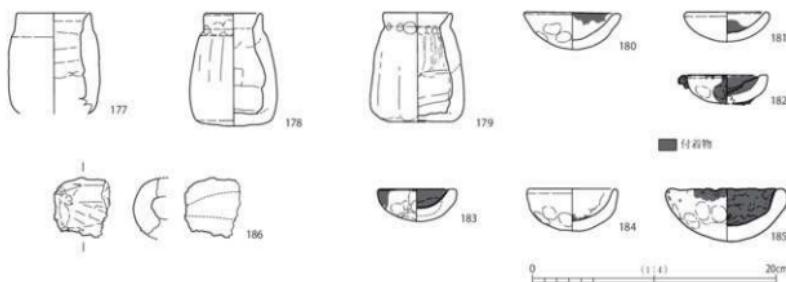


図76 1区4層出土焼塙壺、塙堀、羽口

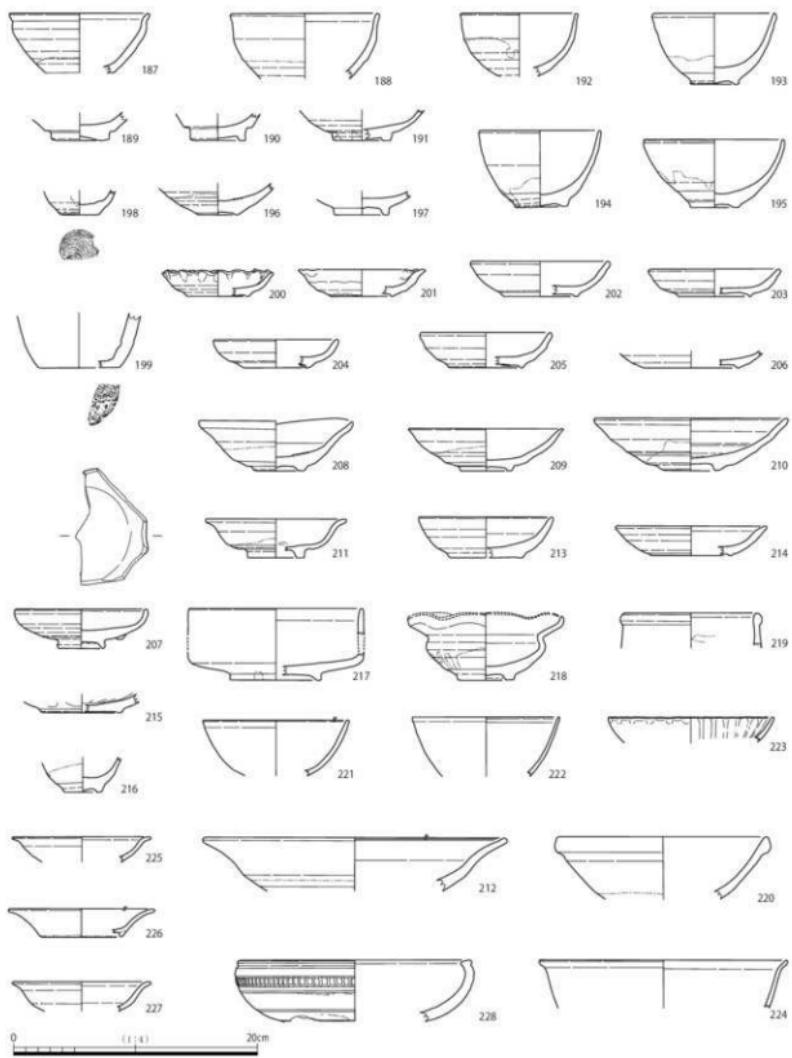


図 77 1区4層出土陶器、輸入磁器

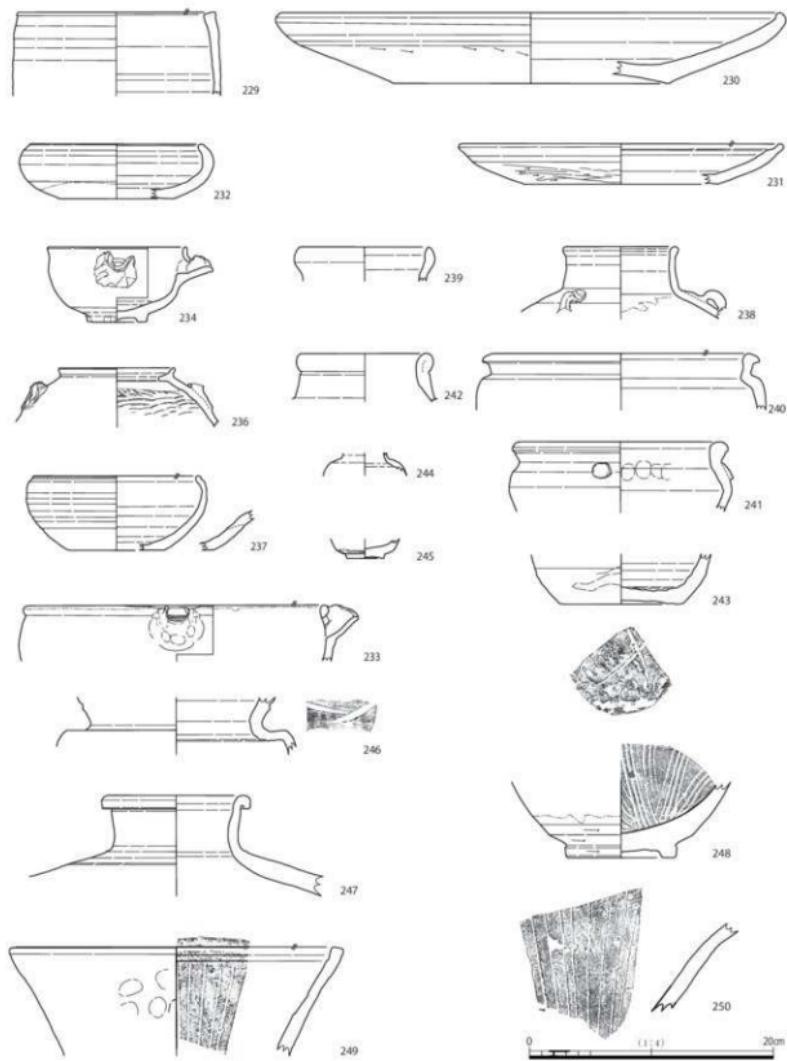
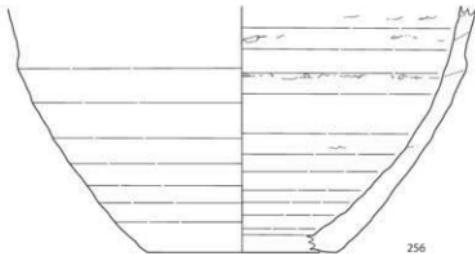
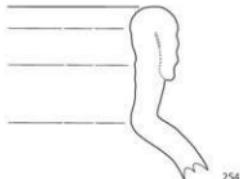
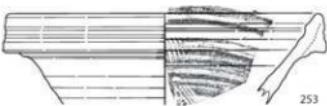
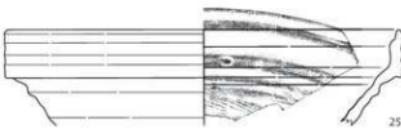
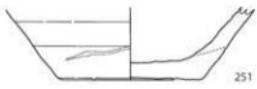
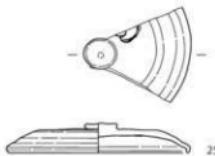


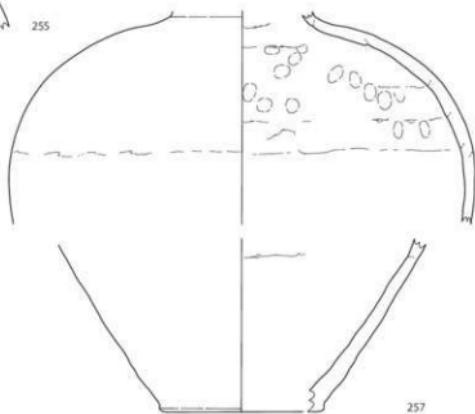
図 78 1区4層出土陶器、焼締陶器



255



■ 墨書



257

図 79 1 区 4 層出土焼締陶器、墨書き土器

## 土師質土器・瓦質土器

以下は図 75 に掲げる。

145 は杯 A で内面に荒い放射暗文がみられる。

146 は皿で底部と体部の屈曲部内外面と、底部外面に指押えがみられる。

147 ~ 154 はいわゆる小皿である。147 は二次焼成を受け内外面とも黒色を呈し、口縁部外面に付着物がみられる。150・151・153 には、口縁部に油煙が付着していることから灯明皿として使用されたと考えられる。155 は浅い皿で、底部から体部の屈曲部を外面の強いナデにより作り出している。

156 ~ 159 は回転台成形の皿である。底部には糸切り痕がみられる。159 は口縁の 2ヶ所に油煤が付着しており、灯明皿として使用された痕跡がみられる。

161 ~ 166 は土師質土器の大皿である。161 は底部外面はナデ、口縁部外面に横ナデを施す。内面は細かい刷毛目がみられる。162 は底部外面は叩き後ナデ、口縁部外面に強い横ナデを施す。内面は板状工具によるナデを施すが、指頭圧痕もみられる。163 は口縁部外面は横ナデ、体部下半は叩きの後に粗いナデを施す。内面は板状工具によるナデを施す。口縁部内外面に煤の付着が認められる。164 は底部外面叩き、口縁部外面はナデを施し、内面は板状工具によるナデを施す。口縁部内面に煤の付着がみられる。165 は底部外面叩き、口縁部外面はナデを施し、内面は細かい刷毛目がみられる。口縁部内側に煤の付着がみられる。166 は口縁部外面は横ナデ、体部下半は叩きの後に粗いナデを施す。内面は板状工具によるナデを施す。

167 は瓦質土器の香炉である。口縁端部と外面は丁寧に磨いており、腰部に花文のスタンプを押す。

168 は土師質土器の小型羽釜で、外面の鈎から下部にかけて煤の付着がみられる。

169 は土師質土器の大和型羽釜の口縁部である。170・171 は瓦質土器の火鉢である。171 は底部外面に焦げ状の付着物が認められる。172 は土師質土器の火舎である。173 は土師質土器の甕、174 は瓦質土器の甕である。175・176 は焼塙壺の蓋である。

以下は図 76 に掲げる。

177 ~ 179 は焼塙壺である。180 ~ 185 は坩堝である。坩堝については付着物の分析を行っている。

第5章 第6節を参照いただきたい。

186 は羽口である。先端にガラス質滓が付着している。

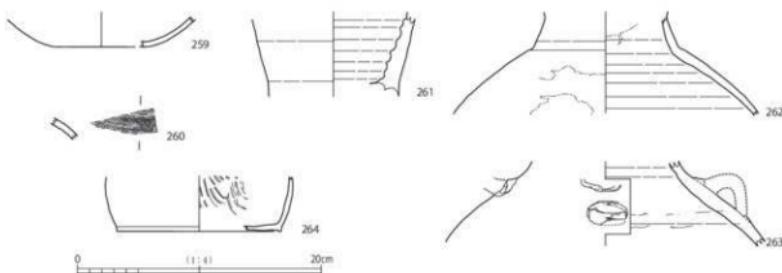


図 80 1区4層出土輸入陶器、焼締陶器

## 2区

### 26 堀

26 堀は、豊臣期大坂城二の丸生玉口（大手口）を逆コに字型の囲む堀の一部である。1区において確認した45 堀の南延長にある。

26 堀は機能時堆積層と、大坂冬の陣講和後に徳川方によって堀を埋めた埋め土と2つの段階に出土遺物を区分できる。本来ならば、両者を分けて報告するべきであるが、ここでは一括して記している。

各層から出土した遺物を確認する際には、表24を参照いただきたい。

出土遺物の年代に関しては、機能時堆積層及び堀の埋戻し客土が慶長20（1615）年を下限とし、徳川大坂城築城時の盛土からは、肥前磁器がみられないことから1630年前後を下限と考えられる事ができる。

以下は、図81～84に掲げる。

### 碗

265～269は唐津である。

265～267は体部下半を除き釉を施す。三日月高台で、高台内には兜巾を残し縮緬皺がみられる。

268は口縁部が端反りになる。269は体部下半を除き釉を施す。

270は志野の碗である。外面に鉄絵が描かれ、高台付近を除き釉を施す。外面の釉が施されていない部分に「フ」のヘラ書きがみられる。また、内面見込に非常に薄いが鉄絵が認められる。

### 皿

271は瀬戸・美濃の内禿皿である。灰釉を施す。高台内に輪トチ痕がみられる。

272～275は唐津である。

272は底部付近を除き釉を施す。三日月高台で、高台内に兜巾を残す。口縁部は外反する。273は体部下半を除き釉を施す。三日月高台で高台内に兜巾を残す。内面見込みに胎土目が3ヶ所みられる。

274は内面に鉄絵が描かれ、透明釉を施す。275は高台付近を露胎にする。二重高台である。内面には鉄絵が描かれ透明釉を施す。

276は産地不明である。胎土は灰色を呈し均質である。釉は銀化が著しい。

### 向付

277～280は唐津である。

277は高台付近を除き、透明釉を施す。内面には鉄絵が描かれる。278は口縁部を窪ませ輪花状に整形する。内面には鉄絵を描く。体部下半を除いて長石釉を施す。高台内には兜巾を残す。279は口縁部分の小片である。内面に繪文の鉄絵を描き透明釉を施す。280は口縁部分の小片で、口縁端部を内側に短く折り曲げる。内外面に鉄絵を描き透明釉を施す。

281～284は志野である。

281は、入隅方形の平面形を呈し、底部は甚簡底である。外側面に草花文が描かれ、全面に施釉する。底面に4ヶ所目跡がみられる。282は口縁部を外側に折り曲げ、玉縁状にする。内面には鉄絵が描かれ内外面に施釉する。283は底部の小片で、甚簡底を呈する。内面見込みに鉄絵を描き、内外面に長石釉を施釉する。284は底部の小片で、輪高台である。内面見込みに鉄絵を描く。

### 小杯・鉢

285は唐津の小杯で、高台周辺を除いて釉を施す。高台内には兜巾を残す。

286は唐津の鉢である。外面に鉄絵を描き、透明釉を施す。



図 81 2区 26 堀出土陶器 (1)